

2月総評 西躰 かずよし

今月は魅力的な作品が数多くあった。他にも良い作品があったが、特に惹かれた作者の評を中心に書いてみたい。

その色した折り鶴のはね折り曲
げてとべない鳥をとべなくしたい 白野 新潟県

この著者の持ち味は青年期に抱える矛盾や葛藤を等身大のまま作品に表現しているところにあると思う。いわゆる詩の投稿も多いが、私としては短歌のような定型感を有する作品により惹かれる。さまざまな表現を試みる中で、自身の表現を突き詰めていって欲しい。他にも惹かれた作品としては、「ストーブの熱が飽和する部屋に／この世でもっともきれいなふたり」、「A4のノートにはさまる虫の死を／うすく知らせるひかりのにおい」「真夜中がこんなにもあかるいこと／を 星はどうしてなつかしいの」などがあった。

野球部の安藤が轢かれたのって
ラブホの駐車場やって
すごい大人やん安藤 うすしか 東京都

いわゆる文学的、俳句的、短歌的、詩的など、そうした飾りの表現を捨てたところで勝負している。この著者の他の作品に「おおごえでなんかいも／あいさつした／あたまおかしいって／いわれた」といったものがあるが、技術的な洗練から生じるそれとは別のリアリティーがある。

塾のドア開ける
夜空は澄んでいる さいう 愛知県

この人の作品には、この人ならではの感性感じさせるものが多く、それはひとつの才能と言ってもいいと思う。「夜空が澄んでいる」というさりげない呟きひとつで、塾からの開放感がうまく表現されている。他に「パイさくり／さくさくパイさくり／／さくり」や「飛び上がるように昇降口抜けて／入部届はそらいろになる」といった作品があるが、いずれも言葉の鮮度が高く、それらのみずみずしさは大きな魅力であると思う。

心臓はアクリルのなか春の雨 細村 星一郎 東京都

この著者の魅力は、骨太の詩情と、それを支えるすぐれた俳句の技術にあるだろう。俳句はものの描写に長けた形式だと思うが、その魅力が十分に伝わってくる。アクリルの中の心臓はいかにも寂しそうで、春の雨と響きあう。「春だからクリームソーダ色の夢」「春めきに紙つみあげるしかなくて」といった他の作品についても同様の安定感がある。

秒針の音の隙間に夜を聞く サトリ 東京都

日常の中にある危機というべきものだろうか。そうした不安定感が上手く表現されている。「音の隙間」や「夜を聞く」というフレーズにおいて、作為的な印象が皆無というわけではないがうまくまとめている。他の「履歴書の空白に轢き殺されてみる」といった作品についても同様の印象を持った。

踏青の果て朽ちている郵便車 長谷川柊香 宮城県

作品の繊細さと巧みさという点では際立っている。この作品については「踏青の果て」という一節で、その世界に一気に引込まれた。他の作品に「短日のうどんぼろんとざるを出て」「主文、蛍を自由の刑に処す」「春灯がちりちりちりと闇溶かす」といったものがあるが、感情の襲を描写することに関しては抜きん出ているように思う。